

あり、又その商品作物の種類も様々であるが、現在、発達段階により三つの地域に大別される。その地域を見ると、1970年の国勢調査の時点より、米作地域が縮小し、全般的に商業化の進展が著しい。農業の商業化が活発に進展している現在、農業地域構造も刻一刻と流動してやまぬものであることを再認識したのである。

厚木市の工業化と地域の変貌

米 山 和 子

本論文は、神奈川県の新興都市厚木市を調査地域とし、同市に本格的な工場進出が始まった昭和35年以降を考察の対象とした。テーマは厚木市の工業化の過程と工業の内容、それに地域の変貌の実態である。

厚木市の工業の主力は、京浜工業地帯の過密化によって移転してきた進出工場である。昭和30年代、日本経済の高度成長期に、京浜にあった大企業は工場拡張の必要に迫られた。しかしすでに本社工場を拡張する空間的余裕を持たなかったり、条例によって新設拡張を制限された各社は、東京の近くに進出することを有利としていた。当時厚木市は市制を施行したばかりの新生都市で、まだ純農業地帯であった。それで厚木市では昭和35年市を発展させるために工場の誘致条例を制定し、誘致活動に力を入れることになった。折しも東名高速道路の建設が決定し、そのインターチェンジが厚木市内に造られることになり、進出場所を捜していた各工場の目は厚木市に集中する結果となった。

厚木市は内陸に位置し、鉄道は小田急線が南の方を一本通っているだけで、物資の運搬はほとんどトラックにたよっている。したがって、当地に進出した工場は運搬の楽な軽工業や、電気機械部品の組立て工場が主である。また、台地上の広く平な土地が比較的安く手にはいったため、規模の大きい工場も進出してきている。工業用地は農地を転用し、工業用水は多く深井戸にたよっている。今一番の問題は現業部門の労働力不足である。組立て工場は多くの人手を必要としているが現業部門の仕事は当地域内の若い人から嫌われているため、各社とも地方へその労働力を求めている。地方出身者は寮に入る人が多いので、厚木市内の大工場では従業者中の入寮者の割合が特に多いようである。

急速な工場進出は地価の高騰を招いた。昭和40年代にはいり、工場進出の嵐がおさまってきた現在、住宅団地の建設が盛んに行なわれている。また交通位置のよさを生かした大流通団地3ヶ所の建設計画も決まり、着工中である。これは、東京の過密化により最早東京では消化吸収されえない機能を、東名高速道路によって東京と直結した厚木へ移そうというものである。

このように東名高速道路のインターチェンジが出来たことにより、厚木市は大きく変わりつつある。大手不動産業者は厚木の大開発を予定し、神奈川県も県央開発の拠点として厚木に目を向けている。しかし現実に厚木に居住し生活している人々にとって、これらの開発はプラスになっているのであろうか。現在も刻々と、大きな力によっていやおうなく厚木の姿は変えられているのである。